

特別支援学校における個に応じた支援の在り方

佐賀県立北部養護学校 教諭 前山 齊

佐賀県立盲学校 教諭 久保田 美志

1 研究の趣旨

特別支援学校では，個別の教育支援計画や個別の指導計画などを作成し，個々のニーズに応じた支援が行われ，将来への生きる力の育成が目指されている。生きる力とは，子どもが学校生活や学習活動の中で得た知識や経験などを，様々な場面で主体的に活用しようとする姿勢や物事に主体的に取り組もうとする姿勢であり，障害のある子どもの自立や社会参加のための基礎になるものと考えられる。

子どもが主体的に学習に取り組むためには，子どもの様子やもっている力を教師が的確に把握した上で，子どもが「もっとやってみたい」と思えるような活動や課題を用意し，活動中の子どもの姿を見ながら，教師がその時々合った支援を行うことが必要である。さらに，活動後に，「支援が個に応じたものであったか。」を検討し，再度，支援内容をよりよいものにしていく過程が重要である。

子どもの実態把握や必要な支援に関する観点についての整理は，佐賀県教育センターの平成17，18年度長期研修で行われている。学校現場でも，実態把握や支援内容についての検討は十分になされていることが多い。しかし，活動中や活動後において，「支援が本当に適したものであったか。」ということを取り返し，支援を改善するまでには至っていないというケースが少なくない。

そこで，本グループでは，支援の振り返りと改善に着目し，支援について複数の教師で振り返り，改善するための振り返りシート「みるみるシート」の作成について研究を行った。

2 研究教科・領域等

特別支援学校中学部の領域・教科を合わせた指導の中の生活単元学習及び教科別の指導の中の外国語(英語)において研究課題の解決に向けて研究を行った。

3 研究の成果

(1) 主体的な子どもの姿を実現するための個に応じた支援の在り方について

子どもの主体的な姿を願い，支援を個に応じたものにするためには，支援について複数の教師で検討し，繰り返し改善していく必要があった。そのためには，どのようなことから支援を振り返ればよいのかについて具体的に分かる観点が必要であった。この観点を明確にすることで，複数の教師で検討する場合であっても，共通理解ができ，客観的かつ的確な振り返りができると考えた。そこで，教師が支援を振り返る際の観点を「振り返りのための観点」とし，検討していくことにした。

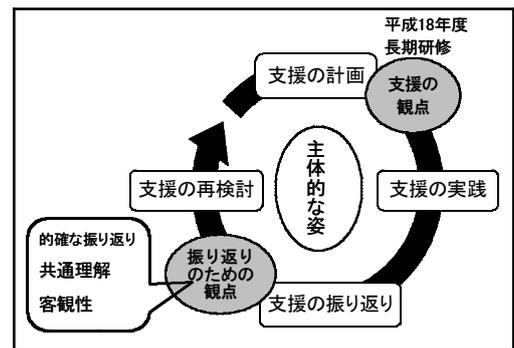


図1 支援と振り返りのサイクル図

(2) 「支援の観点」の再検討と「振り返りのための観点」の整理

「振り返りのための観点」を明確にするためには，まずは，適切な支援とはどういうものかという考察が必要であった。そこで，佐賀県教育センターにおける平成18年度長期研修において整理された5つの「支援の観点」について検討を重ねた結果，その観点を活用することとした。次に，そ

の「支援の観点」を基に「振り返りのための観点」について検討を行った。活動に取り組む主体者は子どもであり、子どもが見せる姿から支援の適切さを振り返ることが重要である。そこで、子どもの主体的な姿を、自分から活動に取り組み、自分で活動をやり遂げる姿ととらえ、「自分から」「自分で」をキーワードに、「振り返りのための観点」を設定した。教師のかかわりについては、教師自身が自分のかかわり方を自覚することが大切であるので、自己評価とした。

(3) 「みるみるシート」の活用とその有効性

「振り返りのための観点」を基に支援を検討するための「みるみるシート」を作成、試用した。授業後の話し合いで、「みるみるシート」を活用したところ、「教師のかかわり」についての再検討が必要だと分かった。そこで、子どもが「自分から」「自分で」取り組む姿とは、どのような姿なのかを掘り下げて考えた。その姿を保障するために、教師はどのようにかかわればよいのかをグループで協議し、以下のような観点を導き出した。また、教師のかかわりは支援の基盤になるものと考え、観点の1番目に表記することにした。「みるみるシート」の書式も検討した後、それぞれの所属校で再度試用を行った。

表1 「支援の観点」及び「振り返りのための観点」

支援の観点	適切な支援と予測される子どもの姿	振り返りのための観点
教師のかかわり	教師は、子どもの主体的な姿を大事にしながらも活動し、つまずきが見られたときにさりげなく支援することで、子どもは自分から取り組み、自分でやり遂げるのではないだろうか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが判断し、選択し、決定して自分から始めようとする姿を大事にできたか ・ 子どものつまずきに気づき、つまずきの原因を取り除くかかわりをしたか ・ 子どもが自分の力でやり遂げようとする姿を妨げなかったか
できることを生かした方法	子どもの様子や過去の経験を踏まえたと上で、活動内容を考え、子どもができる活動を整えれば、子どもはもてる力を生かして自分から取り組み、自分でやり遂げるのではないだろうか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分から活動に取り組もうとしていたか ・ もっている力を自分から生かして取り組んでいたか ・ 自分で活動をやり遂げていたか
教材・道具・補助具の工夫	使いやすく安全な教材や道具であれば、子どもの活動はスムーズになり、子どもは自分から取り組み、自分でやり遂げるのではないだろうか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安全に使っていたか ・ スムーズに使っていたか
活動の見通し	分かりやすい方法で日課や活動内容、活動量を伝えれば子どもは見通しをもって、自分から取り組み、自分でやり遂げるのではないだろうか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 活動の始まりと終わりが分かっていたか ・ 自分から活動の流れに沿って取り組んでいたか
場の配置	準備や後片付けができるように、活動が途切れないように環境を整えていけば、子どもの活動は円滑になり、子どもは自分から取り組み、自分でやり遂げるのではないだろうか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分で準備や後片付けができたか ・ 活動の流れが円滑であったか

「みるみるシート」を活用することにより、支援の改善点が明らかになり、次の支援をより適切なものに改善することができた。「振り返りのための観点」は子どもの姿を基本としているので、今まで以上に、活動中の子どもの姿をじっくり見取り、主体的な取り組みを大切にしようという教師の意識が高まってきたといえる。支援の改善と教師の意識の高まりにより、以前より、子どもの活動はスムーズになり、「自分から」活動に取り組み、「自分で」活動をやり遂げる子どもの姿が多く見られるようになった。

また、「みるみるシート」を活用したことで、複数の教師が同じ観点をもって、支援について焦点を絞った円滑な話し合いを行うことができた。「みるみるシート」は話し合いの充実と短縮化にも有効であった。

4 今後の課題

- (1) 「みるみるシート」を活用した実践を積み重ねることで、「振り返りのための観点」についての妥当性とシートの有効性を、更に詳しく検証していく必要がある。
- (2) 「みるみるシート」の記入時間や話し合いの時間の確保について、課題が残っており、各学校や教科の特性に応じて、シートの活用方法を検討していく必要がある。

《参考文献》

- ・ 小出 進 『生活中心教育の原理』 2002年 ケー アンド エイチ